

バイオ系のキャリアデザイン

就職支援 **OG OB** インタビュー編

Interview ①

江崎グリコ株式会社 健康科学研究所

久保 亜希子



出身大学・卒業年度：千葉大学大学院自然科学研究科 2001年 博士課程修了（農学）
博士論文タイトル：イネsugary-1変異体を用いたアミロペクチン生成過程の解明と制御

「現在の仕事について」

◆担当職務

多糖の酵素合成技術を応用した機能性素材開発

◆現在までのキャリアパスとその配属での仕事内容とそこでのやりがい

2001年－2004年

科学技術振興事業団 研究員（於・秋田県立大学）
大学院生の頃から（独）農業生物資源研究所でお世話になっていた中村保典教授の異動に伴い新設の秋田県大へ。イネのデンプン生成研究ではトップレベルの研究室で、研究の基礎と奥深さ、真摯な姿勢を学びました。

2004年－2006年

米国アイオワ州立大学 ポスドク研究員
歴史的にさまざまな分野でデンプン研究の盛んな大学で、Alan Myers 研でトウモロコシのデンプン合成代謝について分子遺伝学的視点から解明を試みましたが、多くを学び、公私ともに充実した2年間となりました。

2006年－2009年

大阪府立大学 ポスドク研究員
北村進一教授からは、アウトプットを意識した研究を心がけることを学びました。酵素合成アミロースに関するプロジェクトで、現在の会社との縁があり、今に至っています。

◆現在の会社・組織の魅力と就職を決めた理由

研究職を志望するにあたり、サイエンスによる裏付けを重視した研究方針に好印象を持ちました。一流の糖質合成技術の蓄積があり、これまでの自分の研究歴を役に立てることができるのではとの思いが決め手になりました。

◆将来設計（描けるキャリアパス）

すでに確立した技術と、新しい技術を組み合わせ、研究シーズを発展させて、製品化・事業化を実現させたいと考えています。

◆社会人として一番困難だったこと&どう乗り越えましたか

海外生活開始時がもっとも困難な状況でした。上司は信頼できる人でしたが、ラボのメンバーの8割は米国人で、数人のアジア系学生がいたものの、周囲のラボにも日本人はおらず、つたない英語はなかなか通じず、初めは疎外感を覚えました。あきらめずに伝えようとする姿勢に応じてくれる人も増え、とても助けられました。結果を出すと周囲の目が変わったのも覚えています。また、メンバーの年齢層も厚く、実にさまざまな個性と経歴の持ち主の集まりで、互いを尊重する姿勢は勉強になりました。近年企業でも取り組まれているダイバーシティについて経験することができました。

◆仕事のプロになるコツ

責任感をもって仕事に取り組むことだと思います。少々苦手なことがあっても意欲でカバーできる場合もあります。

◆博士力、どこで発揮していますか？

専門性が強みです。専門外の分野にいかにか知識を広げていけるかが課題です。

「人生について」

◆何のために働くのですか？

自分が実現したいことを実現し、それを通して社会に貢献するため。

◆ワークライフバランスで工夫していること

公私ともに優先順位をつけ、時間をマネジメントすること。少しの割合でいいので全体を俯瞰する余裕を持つこと。

とを心がけています。

◆将来の展望

現在進めているプロジェクトを何とか形にして、成果が目に見えるようにしたい。また、第一線で研究開発を続けられる限り続けたいと思います。

「後輩へ」

◆学生時代にやっておいたらよかったと思えること
企業研究者にとっても英会話力は必須になっています。語学の勉強も大事ですが、文化を理解することの重要性

も感じています。

◆その他なんでも、後輩に伝えたいこと

博士課程への進学を決めた時、先輩研究者から「したたかな楽観主義者であれ」とのお言葉をいただきました。当時は進学後の就職難が社会問題になっていましたが、将来の不安があっても心に余裕を忘れず、一方でチャンスに備えて準備を怠るな、とのアドバイスでした。これは現在でも心に留め置くべき言葉だと思っています。

連絡先 E-mail: kubo-akiko@glico.co.jp

Interview ②

大阪大学生物工学国際交流センター（助教）

大橋 貴生



出身大学・卒業年度：大阪大学大学院理学研究科科学専攻 2007年 博士後期課程修了
博士論文タイトル：ペクチン生合成に関与するポリガラクトuron酸合成酵素に関する研究

「現在の仕事について」

◆担当職務

自身の研究プロジェクトの遂行，学生の教育，研究室およびセンターの運營業務，国際交流業務など。

◆現在までのキャリアパスとその配属での仕事内容。

学位取得後，旭硝子株式会社 ASPEX 事業推進部にポスドクとして入社しました。香川大学，次いで九州大学へ出向し，分裂酵母糖鎖のヒト型化の研究に従事していました。旭硝子に在籍していた間，旭硝子の本社や中央研究所には，研究打合せや研究報告会で訪れるのみで，会社の研究所で実験したことはありませんでした。3年半在籍した後，現在の大阪大学の職に就いております。

◆そこでのやりがい

自分自身のアイデアと工夫で研究を進めることができ，世界中の誰も見たことがないことを発見し，学会や論文で発表し，評価や感想を（良いことも悪いことも）いただくことに喜びを見いだしています。また最近では，ふとした瞬間に，配属当初は手がかかっていた学生さんが成長し，頼れる存在になっていたことに気付いたときに，喜びを感じるようになりました。

◆現在の就職を決めた理由

本質問を受けて，高校の生物の授業で，解糖系やクエン酸回路などの生命現象が化学反応式などの分子で記述できることを学び，生化学の分野に強く興味を持ったことを思い出しました。その後，高校3年生の時に理系に進むことを決めて以来，漠然とアカデミアで研究することをイメージしていました。特に強く意識したわけではないのですが，結果的に，大学院，ポスドク，大学教員と生化学関連の研究に携わることになりました。振り返ると，当初抱いた興味と現在のラボの研究分野がマッチングしていたことが理由だと思います。

◆将来設計（描けるキャリアパス）

職位にこだわりはありませんが，アカデミアの世界にいる以上，一度はPIになって自分のラボを持ちたいと思います。

◆挑戦したいと思っていること

東南アジアの大学の研究室への短期滞在は経験しましたので，次は欧米の研究室で当地の研究哲学を学ぶために，研究・実験してみたいです。

◆社会人として一番感動したこと

自身のアイデアで取り組んだ実験で良い結果が出て，細部に至るまで自分のこだわりが出せた論文が書けたことです。

◆仕事のプロになるコツ

責任感を持って、当たり前のことを当たり前になすことだと思えます。

◆博士力、どこで発揮していますか？

まだまだ修行中で博士力を発揮できていませんが、論理性、客観的な視点、独創性が博士（理学）として大事だと思うので、これらの点を磨くことを日々心がけています。

「人生について」

◆何のために働くのですか？

人の役に立つため、喜んでもらうためです。基礎研究であれ、応用研究であれ、実際に人の役に立つまでのタイムスパンの違いがありますが、いずれは社会の発展、人類の幸せに貢献するため、と思って働いています。大学で教育に携わるのも社会のためと思っています。

◆ご自分にとって、お金を稼ぐ意味

家族が生きていくために必要です。

◆ワークライフバランスで工夫していること

朝食を子供と一緒に取ること。日曜日や祝日に家族でどこかに出かけること。

◆現在の夢

世代を超えて人の役に立つ、おもしろい研究成果を上げること。関わった学生さん達がそれぞれの分野で活躍すること。

「後輩へ」

◆学生時代にやっておいたらよかったと思えること
大学の体育会でのクラブ活動。海外留学。

◆その他なんでも、後輩に伝えたいこと

学生時代はいろんなチャレンジをして、いろんな失敗をしてもらえたらと思います。失敗は学生の特権です。また、いろんな遊びをして、人としての懐の深さを醸造してもらえたらと思います。

著者紹介 E-mail: ohashi@icb.osaka-u.ac.jp